

## 頼通邸高陽院の礎石建物

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

藤原頼通の邸宅として著名な高陽院は平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町の2町四方を占める大邸宅で、寛仁三年(1019)に新造され、治安元年(1021)に落成しました。以後、11世紀から12世紀初頭にかけて幾たびかの罹災と再建を繰り返しますが、天皇の里内裏としてたびたび利用されるなど、平安時代後期を代表する邸宅で、『駒競行幸絵巻』などに描かれた華麗な情景はつとに有名です。

平安時代後期の邸宅は、「寝殿造」としてその配置が復元されていますが、高陽院についてはよくわかっていません。『栄花物語』に記された「こまくらべの行幸」での高陽院の情景は、

高陽院殿の有様、この世のことと見えず。海龍王の家などこそ、四季は

四方に見ゆれ。この殿はそれに劣らぬ様なり。例の人の家造などにも違ひたり。寝殿の北・南・西・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。

とあるように、一般の邸宅とは様相が異なり園池が寝殿の四方に配されていたことがわかります。

過去の発掘調査でも、高陽院は「海龍王の家」にふさわしい広大な園池をもっていたことが判明しています。九町の調査で華麗な洲浜を、十町の調査で園池の西岸汀を、十五町の調査で中島あるいは出島と考えられる遺構を検出しており、池底の標高からこれらが同一の池(園池1)であることが推定できました。また、十六町の調査では園池の東岸洲浜を発見しましたが、先の園池よりも池底は最大で0.8m高く、独立した池(園

池2)であることが判明しました。これらの調査成果から、高陽院は敷地の南西より少なくとも1町ほどの規模を持つ広大な園池1があり、北東の独立した園池2から遣水などで南西の園池1に水が流れ落ちていた様子が推定できます。ただ、建物跡は発見できず、一般の「寝殿造」とは異なるという建物配置についてはまったく不明でした。

ところが、1997年4月に行なった発掘調査において、初めて建物跡の一郭を発見することができたのです。発見した建物遺構は、頼通時代の建物北西部と東西廊の一部で、特に建物北西隅には礎石と雨落ち溝が残っていました。この礎石は長径0.9mほどの砂岩で、泉南から和歌山の海岸に分布する和泉砂岩という石です。高陽院を



『駒競行幸絵巻』 和泉市久保惣記念美術館蔵

造営する際に海岸から趣のある石を運び込み、礎石として用いたと考えられ、「海龍王の家」と例えられた邸宅の様子をうかがうことができます。建物の性格はわかりませんが、南北棟である可能性が高いこと、西に東西廊が付属しており侍廊と考えられることなどから、寝殿の西対あるいはそれに準ずる建物と推定できます。

『駒競行幸絵巻』によると、西対の東には渡廊でつながれた寝殿があり、南には中門廊と釣殿がみえます。ここで問題となるのは、寝殿との関係です。今回発見した礎石建物跡の東で、園池北岸の華麗な洲浜を発見しています。寝殿はこの洲浜の北側に推定できますが、検出した建物は園池洲浜のすぐ西で、寝殿の南西に位置することになります。寝殿と渡廊でつながるには一度北に上がって東に曲がらなければならず、今回検出した建物の北側にもう1棟建物があることも想定できそうです。

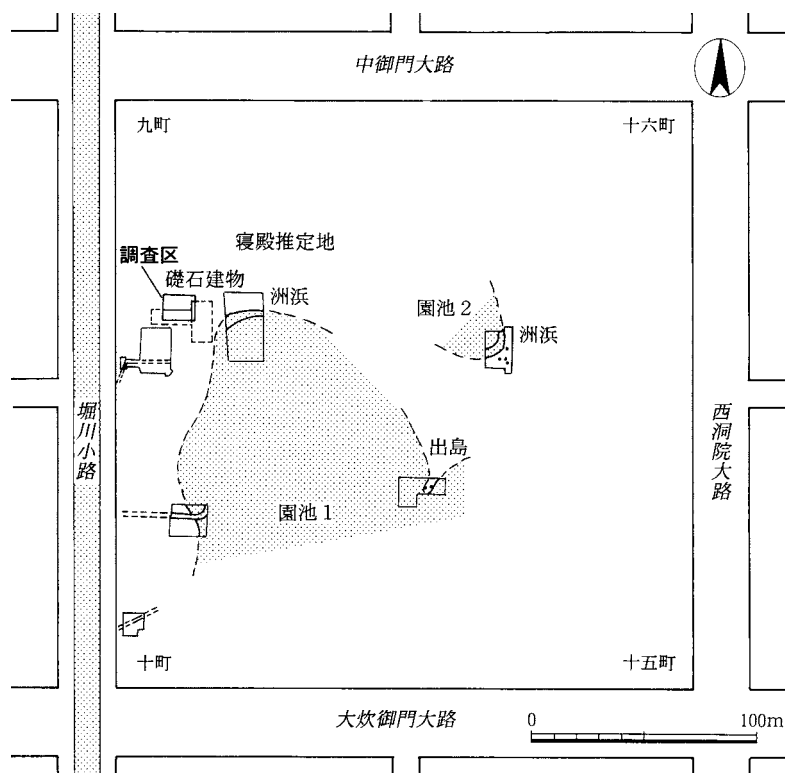
また、礎石建物は頼通時代よりも前に造られた園池を埋め立てて造成していることが判明しまし

た。高陽院はもともと桓武天皇の皇子である賀陽親王の邸宅として営まれ、東西1町・南北2町の敷地でした。『日本紀略』延喜五年(905)9月に高陽院の失火の記載がみられ、頼通伝領直前の『御堂関白記』寛弘元年(1004)12月条にも失火記載が認められることから、9世紀から10世紀を通じて皇室あるいは上級貴族に伝領されていたと考えられます。10世紀以前

の高陽院にも園池洲浜が確認され頼通はこの園池を踏襲して高陽院を新造したことが推定できます。

高陽院は平安京左京の中で、最も遺存状況が良好な地域であることが今回の調査でも裏付けられました。今後も継続して発掘調査を行ない、絵巻物の中でしかわからなかった高陽院の構造を明らかにしていく必要があるでしょう。

(網 伸也)



頼通時代の高陽院跡 遺構配置図



礎石建物跡 写真中央の白い石が和泉砂岩(南西から)



礎石建物と東西廊 復元図